

## 西欧の主要美術館・博物館におけるビルマ美術の展示

渡邊 佳成

2012年8-9月にオランダ、フランス、ドイツの美術館、博物館を訪問し、東南アジアの古典期美術の諸作品を実見する機会を得た<sup>①</sup>。本報告では、各美術館・博物館に展示されていたビルマ関係の作品を紹介し、それらがどのようなプラン、配列で展示されているのかを確認していきたい。また、ビルマ仏教美術の研究は、その様式、編年ともに、本格的な研究はようやく緒についたところであり、世界各地に散在する美術作品のリスト化が求められている。本報告はその第一歩に資するものでもある<sup>②</sup>。

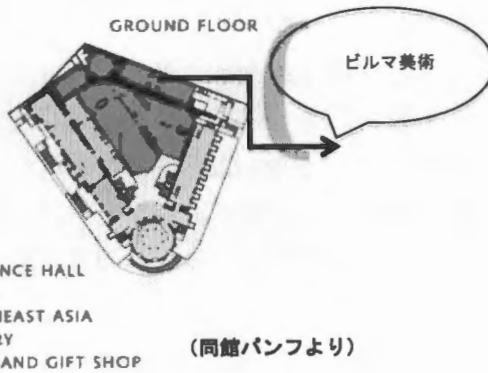
### <フランス>

国立ギメ東洋美術館 Musée National des Arts Asiatiques – Guimet (パリ)<sup>③</sup>

<http://www.guimet.fr/fr/>



ヨーロッパ有数のアジア美術のコレクションを誇る美術館。東南アジア美術では、かつて植民地であった仏領インドシナ、特にカンボジアのクメール美術のコレクションが有名



である。展示も一階正面のホールにはアンコール期のクメール美術を代表する名品が立ち並び、その奥のホールを取り囲む各部屋にもクメール美術の各様式を代表する彫刻が配置されている(左図参照)。さらにその外側の各部屋には、右から、タイ、ビルマ、インドネシア、ベトナム(チャンパ)の美術作品が並ぶ。ビルマの作品の展示は、以下に見るように、部屋というより小コーナーに6点の

みの展示で、他の東南アジア諸国の美術に比べても少なく、また、必ずしも時代順、様式ごとの配列ではない。もちろん、これらが所蔵作品のすべてではないが、現在のところ、所蔵作品のデータベースは公開されていないので、選択の基準は不明である。

## <展示作品>

### 仏坐像(触地印) (写真1)④

マンダレー様式

19世紀

ブロンズ

MA 6210

コンバウン時代後期に制作された典型的なマンダレー様式の仏像、足の両脇に垂れ下がった衣に特徴があり (cf. McGill (ed.) 2009: 76)、中国からの影響を考えるとよいかもしれない。

### 宝冠仏坐像(触地印) (写真2)

シャン様式

19世紀

ブロンズ

[台座に碑銘]

MA 6211

Jambupati 型式<sup>⑤</sup>の宝冠仏であるが、ややユーモラスな顔立ち、ストウパー様の頭頂を持つ宝冠、細身の体軀などに特徴がある。宝冠の葉状突起および両側に張り出した火焰状のフランジは、この型式のものでは簡素である。台座の碑銘によれば、ビルマ暦 1234 (1872)? 年の作成。

### 宝冠仏坐像（触地印）（写真 3）

シャン様式

18-19 世紀

木 漆・塗金

MA 4892

典型的な Jambupati 型式の宝冠仏。宝冠の葉状突起も大きく、両側の火焰状のフレンジも立派である。また、頭部の比率が大きいのも特徴の一つである。

### 仏立像（写真 4）

パガン様式

12 世紀？

ブロンズ

パガン遺跡を代表するアーナンダ寺院の四仏を彷彿とさせる、パガン時代前期の様式を伝える仏陀立像。東インド・パーラ朝の仏像の様式の影響を強く受けており、螺髪と肉髻およびその上に蓮の蕾のような突起が見られ、顔は丸顔に近く、逆八字の眉、視線を下に落とした眼、肩につかんとする長い耳朶などの特徴を持つ。また、衣も薄く、衣紋線はほとんど描かれず、足首の少し上まで垂れた衣の裾は波形になって左右に広がっている。

### 宝冠仏坐像（触地印）（写真 5）

ビルマ様式

15-16 世紀

ブロンズ 漆・塗金

MA 5659

宝冠の葉状突起および長い耳朶の先のイヤリングの円盤状のロゼットが特徴的である。Jambupati 型式というよりは、明の影響を強く受けていると Gutman が考えるアラカンの宝冠仏（永楽様式 Yongle Style、cf. Gutman 2001:146-153）との類似を考えたほうがよいかもしれない。なお、宝冠とイヤリングを除けば、どの様式の宝冠仏でも見られる豪華な首飾りなどの装飾品が見当たらず、着衣も偏袒右肩の衣のみとなっていることにも注目すべきである。

### 宝冠仏立像（写真 6）

ビルマ・ポストパガン時代

14 世紀

木 漆・塗金

[H.1.87m; W.0.50m; D.0.25m]

MA3795 (Béguin 1992: 84-85; Musée National des Arts Asiatiques – Guimet 2001: 70)

パガン時代後期の諸仏像の特徴を受け継いだ宝冠仏。王冠の細長い花卉状の突起や両側に飛び出た渦巻き状の花綱については東インドのパーラ朝美術の影響、胸のネックレスや腕輪・脚輪、ベルトなどはクメール美術の影響が指摘されている (Musée National des Arts Asiatiques – Guimet 2001: 70)。

ケ・ブランリ美術館 Musée du quai Branly (パリ) <http://www.quaibrantly.fr/>



2006年に開館した、西欧文明とは異なる諸文明や少数民族の文化を紹介する美術館で、ルーブル美術館の原始美術部門および国立人類博物館の民族学資料、国立アフリカ・オセアニア美術館の民族美術コレクションなど35万点の所蔵資料を誇る。そのうち、3500点あまりが、オセアニア、アジア、アフリカ、アメリカの4部門に分かれた常設展示室に展示されている。「現代のアジアに息づく民俗をとらえるというコンセプト」での展示であるので、ミャンマー関係の資料も、漆塗りのキンマ入れ(写真7)などの工芸品や竹かご(写真8)などの民俗資料のみである。

## <オランダ>

国立民族学博物館 Rijksmuseum Volkenkunde Leiden<sup>®</sup>（ライデン）<http://volkenkunde.nl/>



江戸末期の工芸品や民芸品を集めたシーボルト・コレクションを所蔵していることで有名であるが、かつて植民地であったインドネシアなど、世界各地の民族資料の豊富なコレクションを誇る。図書6万冊あまりを含めて総計20数万点にのぼる資料のデータベースは公開されており（2013.2.28時点では230,439点）（<http://www.volkenkunde.nl/collections/>、図書は<http://www.volkenkunde.nl/rmvbooks/>）、そのうちビルマ関係のものは図書を除けば、218点あり、多くは現代の民俗資料である。

東南アジア関係の展示は、一階左のアジア室、右のインドネシア室に分かれて展示されている。ビルマ関係は、古典期の彫刻、遺物を並べたアジア室の一角に、インド、インドネシアなどの優品とともに2点の展示があった。配列は、基本的には、宗教別、時代別の配置で行われている。

## <展示作品>

### 宝冠仏坐像（触地印）（写真9）

マンダレー様式、19-20世紀

木 漆彩画

4692-1

ギメの写真3同様、典型的な Jambupati 型式の宝冠仏。宝冠の葉状突起も大きく、両側の火焰状のフランジも立派である。また、頭部の比率が大きいのも特徴の一つである。

#### 埴仏（説法印・蓮華座）（写真 10）

ピュー時代

A.D.700-1000

テラコッタ

B79-205

出土地などは不明であるが、両脇にストゥーパ、蓮華座の左右に vyala、象、マカラを配置するなど、ピューの埴仏の典型的特徴を備えている。

アムステルダム国立美術館 The Rijksmuseum, Amsterdam<sup>⑦</sup> <https://www.rijksmuseum.nl/>



10年近く改修工事中で、2013年4月に再オープン予定。現在は、フィリップス棟で17世紀のオランダ絵画を中心としたヨーロッパ美術の展示のみである。8,000点近くのアジア・コレクションが新しいアジア館でどのように展示されるかは、不明。ホームページ上 (<https://www.rijksmuseum.nl/en/explore-the-collection/works-of-art/asian-art>) には、アジア美術の優品が50点ほど紹介されているが、その中にはビルマ美術の作品は含まれず、ま

た、公開されている所蔵品のデータベース（現時点では総数 283,376 点）でヒットしたビルマ関係の資料は、写真、絵画資料、工芸品のみで、古典期の作品は見あたらなかった。

熱帯博物館 Tropenmuseum<sup>®</sup>（アムステルダム） <http://www.tropenmuseum.nl/>



1871年に公開されたハーレムの植民地博物館、その継承組織である植民地研究所（1910）、東インド研究所（1945）を前身とする王立熱帯研究所 Koninklijk Instituut voor de Tropen（1949）の附属施設である博物館のコレクションは、蘭領東インド（インドネシア）をはじめとする植民地の民族資料を中心としつつアフリカやラテンアメリカの資料を拡充してきた。

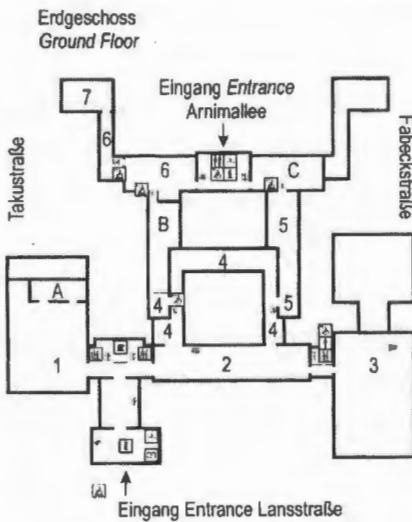
東南アジア関係コレクションは、左の図（Schölvinck and Oele 2009: 28 より）のように、象徴 Symbols、伝統文化 Traditional Cultures、新しい概念 New Ideas、アイデンティティ Identity の四つのテーマに分けて展示されており、古典期の美術作品の多くは“New Ideas”のコーナーにインドネシア

の優品を主体に展示されている。ビルマ関係の展示は、現時点では見られない。

熱帯博物館のコレクションは、総数 34 万点以上、そのうち、作品が 175,000、写真資料が 155,000、絵画・文書資料が 10,000 点あり、公開されているデータベースの検索 <http://collectie.tropenmuseum.nl/default.aspx?lang=en> では、ビルマ関係の作品は 234 点、写真資料は 200 点あるが、古典期のものは含まれていない。

<ドイツ>

ベルリン国立博物館アジア美術館 Museum für Asiatische Kunst, Staatliche Museen zu Berlin® <http://www.smb.museum/smb/sammlungen/details.php?objID=12904&lang=en>



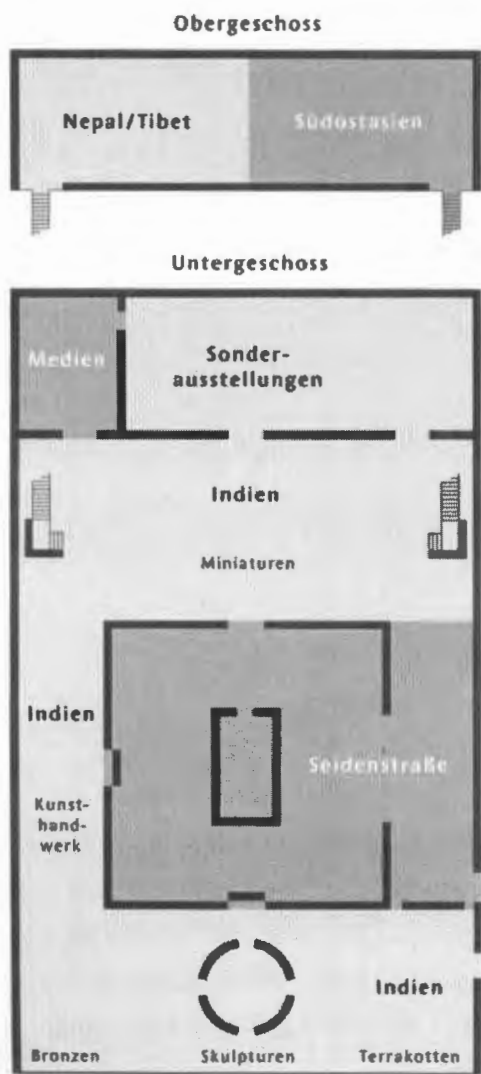
- Museum für Asiatische Kunst
- 1 Kunstsammlung Süd-, Südostund Zentralasien  
*South Asian, Southeast Asian, and Central Asian Art Collection*
  - A Auf Grünwedels Spuren  
*Temporary Exhibition*
  - Ethnologisches Museum
  - 2 Mesoamerikanische Archäologie  
*Mesoamerican Archaeology*
  - 3 Südsee und Australien  
*The South Seas and Australia*
  - 4 Nordamerika  
*North America*
  - 5 Südamerikanische Archäologie  
*South American Archaeology*
  - B Südamerika im Bild  
*Temporary Exhibition*
  - Museum Europäischer Kulturen
  - 6 Kulturkontakte. Leben in Europa  
*Cultural Contacts. Living in Europe*
  - C comicleben\_comiclife  
*Temporary Exhibition*

← (美術館パンフより)

2006年12月に、東アジア美術館 Museum für Ostasiatische Kunst とインド美術館 Museum für Indische Kunst が統合しアジア美術館となり、同じダーレム博物館 Museen Dahlem 内の民族学博物館 Ethnologischen Museum、ヨーロッパ文化博物館 Museum Europäischer Kulturen のコレク



ションとあわせて、世界の諸文化が一堂に会することとなった。



インド・東南アジア展示 (Weis (ed.) 2000 より)

アジア美術館の所蔵品のうち、2万点にのぼる、南アジア、東南アジア、中央アジア(シルクロード)の各コレクションから、400点あまりの作品が選ばれ、左図のように配置されている。その白眉は、トルファン・コレクションと呼ばれる、1902年から1914年にかけて行われたグリェンヴェーデル Albert Grünwedel、ル・コック Albert von Le Coq らのドイツ(プロシア)・シルクロード探検隊がもたらした中央アジア美術の諸作品で、オリジナルの壁画を用いたクチャ第123窟の復元やその他の壁画、彫刻群である。

そして、それらを取り囲むように、インド古代、中世のヒンドゥー、仏教彫刻、ブロンズ像、イスラム時代のミニチュールなどが展示されている。

東南アジア美術の優品は、奥の中二階の部分に、各国数点ずつの展示となっており、なかでも、古代ジャワのブロンズ仏像、カンボジ

アのアンコール時代のブロンズ像やタイの先史時代のバンチェン陶などが重要である。

ビルマ関係のものは、漆塗りの経典(写真11)のほか、13世紀末(1274AD)に完成したと伝えられるミンガラゼーディー Mingala-zedi パゴダ(写真12, 13)の基壇(写真14, 15)に埋め込まれていたジャータカの施釉レリーフ板4点(写真16)が展示されている。

また、第二次世界大戦で失われたインド・東南アジア・シルクロード美術コレクションのうち、連合軍に接収されたものは1956/57年に返還され、ソ連軍が持ち帰ったものも1978年には東ドイツに、そして東西統一後はベルリンに帰ってきたが、いまだに行方不明もし

くは破壊されてしまったものは、目録番号で2,100件（同一番号で数点以上含むものも多い）以上といわれている（同館ホームページおよび Staatliche Museen zu Berlin 2002）。2002年には、サント・ペテルベルグのエルミタージュ博物館の倉庫から失われたとされるコレクションの20パーセント近くが発見されたと言われているが、詳細は不明である。

なお、アジア美術館を含むベルリン国立博物館群のコレクションのうち、9万5千点あまりのデータベース

(<http://www.smb-digital.de/eMuseumPlus?service=ExternalInterface&module=collection&moduleFunction=search>) が公開されているが、ビルマ関係でヒットするのは、552点の写真資料、民俗資料（民族学博物館所蔵）のみで、現時点では、アジア美術館の展示品すら登録されていないようである。

## <展示作品>

### ジャータカ陶板（写真 17）

パガン

13世紀

テラコッタ施釉

32.0 \* 38.0 cm

II 407

[No.8: Gāmanī Jātaka]

パガン時代末期のナラティーハパテ王(1254?-87AD)が1268-74年に建立したとされる仏塔ミンガラーゼーディーの基壇には、ジャータカの各編を一話一枚に表現したレリーフ板が547枚はめ込まれている。インドやほかの東南アジアに残るジャータカは全547篇であるが、パガンの仏塔、寺院の基壇のテラコッタ板や寺院内の壁画のジャータカには、第497-499篇の3篇を加えた全550編のものも多く存在する（Luce 1956、Lu Pe Win 1966、Bautze-Picron 2003）。なぜこの二種類が同時に存在するのかは未解決の問題であるが、13世紀末のパゴダにおいてなお547篇のジャータカが刻まれているということは、「公式」のビルマ仏教史の伝えるところとは違って、パガン時代の末期になっても仏教が一つに統一されていなかったことを示唆していて興味深い。今後は、各パゴダ、寺院の陶板、壁画において、同一のジャータカがどのような図案、モチーフで表現されているかを細かく比較検討していく作業が必要になるであろう。

ミンガラーゼーディーの陶板の中でも釉薬の保存状態が良好なこれらの陶板をインド美術館（アジア美術館）が所蔵するようになった経緯は不明であるが、以

下に述べるハンブルク民族博物館のコレクション同様、19世紀末のドイツの探検隊が持ち帰った可能性が考えられる。

これらの陶板の下部には、ビルマ語（初期のものはモン語）で篇名と番号が書かれているので、どのジャータカを表現しているかは容易に判断できる。この陶板は、首領王本生物語（ガーマニ・ジャータカ *Gāmanī Jātaka* ; 第八篇）（南伝 28:272-273; Cowell 1957 I: 29-30）であるが、百人の兄弟の中で最年少であったガーマニ王子が、父王の死後、大臣によって白い天蓋を捧げられ王位に就いた場面、もしくは、兄王たちに王として認められた場面を表していると思われる。

### ジャータカ陶板（写真 18）

パガン

13世紀

テラコッタ施釉

33.0 \* 39.0 cm

II 410

[no.29: *Kanha Jātaka*]

黒牛本生物語（カンハ・ジャータカ *Kanha Jātaka* ; 第二九篇）（南伝 28: 373-377; Cowell 1957 I: 73-75）。黒牛として生まれた菩薩が、誰も向こう岸まで運ぶことのできなかつた荷駄を運んで得た千金の包みを、育ての母親である老女に渡す場面を表現している。

### ジャータカ陶板（写真 19）

パガン

13世紀

テラコッタ施釉

28.0 \* 32.0 cm

II 457

No.490: *Panchuposatha Jātaka*

五者布薩会本生物語（パンチューポーサタ・ジャータカ *Panchuposatha Jātaka* ; 第四九〇篇）（南伝 34: 335-346; Cowell 1957 IV: 205-210）。陶板に記されているビルマ語の篇名は、“*Chatuposatha*”となっている。マガダ国のバラモンの家に生まれた菩薩が苦行者として森の中に住んでいた時、苦行者、鳩、蛇、豺、熊の五者がそれぞれの理由から布薩 *upo□adha*（説戒・齋）を行っている場面を表現している。ただ、このレリーフでは、本来の話に登場する熊は見当たらず、他の動物（リス？ ネズミ？ 何かは不明）がいる。

## ジャータカ陶板 (写真 20)

パガン

13 世紀

テラコッタ施釉

28.0 \* 32.5 cm

II 463

[No.269: Sujāta Jātaka]

善生女本生物語 (スジャータ・ジャータカ *Sujāta Jātaka* ; 第二六九篇) (南伝 31: 123-132; Cowell 1957 II : 239-242)。梵與 *Brahmadatta* 王の王子として生まれた菩薩が、怒りっぽく粗野で叱ったり怒鳴ったりする母后を諭すために、青椋鳥 (カケス) のうるささに耳をふさぎ、沙羅双樹の木にとまった拘耆羅鳥 (カッコウ) の美しい音色を歎ぶ人々を例にとって、三つの偈をもって法を説き納得させた場面を表している。

## ハンブルク民族学博物館 Museum für Völkerkunde Hamburg

<http://www.voelkerkundemuseum.com/>



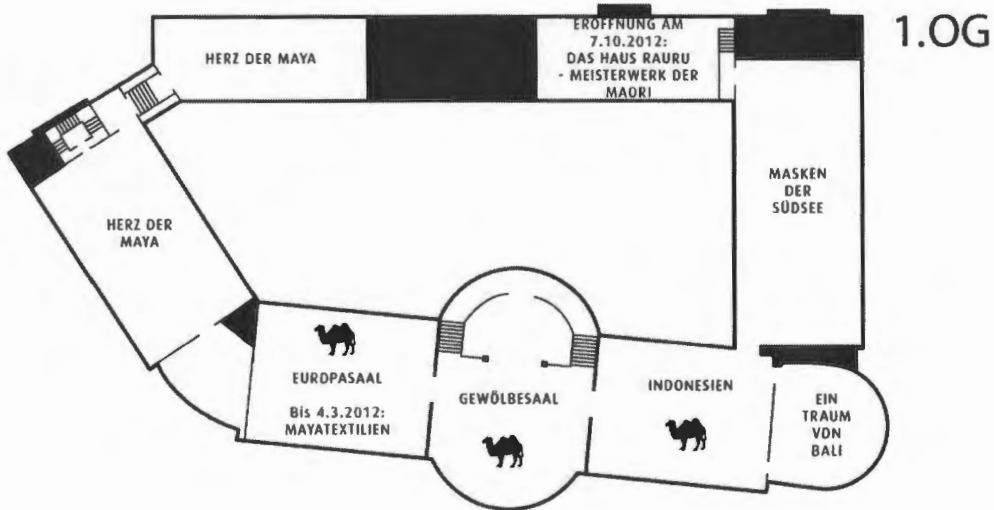
博物学のコレクションをもとに 1879 年に創設されたハンブルク民族学博物館は、現在では、70 万点にのぼる民俗資料、映像資料を誇る、ドイツ最大級の博物館となった。特に、

歴代の館長が指揮した調査・探検隊によって収集された、南海（オセアニア、インドネシア、太平洋）、中央アメリカ、アフリカ関係の資料が豊富である。

南アジア、東南アジア関係では、アジア部門に分類されるインドのヒンドゥー教信仰に関する民俗資料、ミニアチュール、オセアニア部門に分類されているインドネシアのワヤン（影絵芝居）、バリ文化などの民俗資料が特色あるコレクションである。

ビルマ関係の資料としては、19世紀末～20世紀初めにドイツの Thomann の調査・探検隊が持ち帰ったとされる、パガン時代の仏像、寺院壁画（12～13世紀）のコレクションが有名である（Thomann 1923、Whitebread 1971）<sup>⑩</sup>。

しかし、現在一部改修中ということもあるのか、下図（2階の展示プランのうち、インドネシア、南海の部分は改修中）のごとく、所蔵品の展示は、東南アジア・南アジア関係では、バリ文化の展示のみが行われている。



([http://www.voelkerkundemuseum.com//files/museumsplan\\_20.01.2012.pdf](http://www.voelkerkundemuseum.com//files/museumsplan_20.01.2012.pdf) より)

### <参考文献>

秋山光和編著 1968 『ギメ東洋美術館』（世界の美術館 14） 講談社

Asia House Gallery (introduction by Jeannine Auboyer), 1974, *Rarities of the Musée Guimet*, New York: Asia Society.

The Asia Institute, 1948, *Indonesian Art: A Loan Exhibition from the Royal Indies Institute, Amsterdam, The Netherlands, October 31 to December 31, 1948*, New York: the Asia Institute.

- Baptiste, Pierre et Thierry Zéphir, 2008, *L'Art khmer dans les collections du musée Guimet*, Paris: Editions de la Réunion des musées nationaux.
- Baptiste, Pierre et Thierry Zéphir (ed.), 2005, *Trésors d'art du Vietnam: la sculpture du Champa, Ve-XVe siècles, établissement public du musée des arts asiatiques Guimet*, Paris: Réunion des musées nationaux et Paris: Musée des arts asiatiques Guimet.
- Bautze-Picron, Claudine, 2003, *The Buddhist Murals of Pagan: Timeless Vistas of the Cosmos*. Trumbull: Weatherhill.
- Bautze-Picron, Claudine, 2010, *The Bejewelled Buddha: From India to Burma: New Considerations*, New Delhi: Sanctum Books.
- Béguin, Gilles, 1992, *L'Inde et le Monde Indianisé au Musée National des Arts Asiatiques, Guimet*, Paris: Réunion des Musées Nationaux.
- Blackburn, Terence R., 1994, *A Report on the Location of Burmese Artifacts in Museums*, Gartmore: Kiscadale.
- Blurton, T. Richard, 2002, "Burmese Bronze Sculpture in the British Museum," in Green, Alexandra & T. Richard Blurton (eds.), *Burma: Art and Archaeology*, London: The British Museum Press & Chicago: Art Media: 55-65.
- Le Bonheur, Albert, 1971, *La Sculpture Indonésienne au Musée Guimet: Catalogue et Étude Iconographique*, Paris: Presses Universitaires de France.
- Cowell, E. B. (ed.), 1957 (1895-1907), *The Jātaka; or, Stories of the Buddha's Former Births, tr. from the Pāli by various hands*, London: The Pali Text Society (The Cambridge University Press). 6 vols. (in 3 Books).
- van Dijk, Janneke & Wimo Ambala Bayang, 2012, *Photographs of the Netherlands East Indies at the Tropenmuseum*, Amsterdam: KIT Publishers.
- Gutman, Pamela, 2001, *Burma's Lost Kingdoms: Splendours of Arakan*, Bangkok: Orchid Press.
- 原田正美 2009a 「ビルマ所伝「ザブパティ (ジャンブパティ) 王の事跡—翻訳と問題の所在」『大阪大学世界言語研究センター論集』1: 227-246.
- 原田正美 2009b 「ビルマ所伝「ザブパティ (Jambupati) 王の事跡」(1772)の意義について」『パースタディウム』231: 57-71.
- Hasson, Haskia, 1993, *Ancient Buddhist Art from Burma*, Singapore & Bangkok: Taisei Gallery & White Lotus.
- Htwun Hmat Win, Sao, 1986 (1977), *Myanma Yoya Patima Theikpan Pinya Mudramya (Burmese Buddhist Iconography)*, Yangon: Ministry of Religion.
- Karow, Otto, 1991, *Burmese Buddhist Sculpture: The Johan Moger Collection*, Bangkok: White Lotus.
- Legêne, Susan & Janneke van Dijk, 2011, *The Netherlands East Indies at the Tropenmuseum: A Colonial History*, Amsterdam: KIT Publishers.
- Lowry, John, 1974, *Burmese Art*, London: H.M. Stationery Office.

- U Lu Pe Win, 1966, "The Jātakas in Burma," in Ba Shin, Jean Boisselier & A. B. Griswold (eds.), *Essays offered to G. H. Luce by His Colleagues and Friends in Honour of His 75 Birthday* (Ascona: Artibus Asiae) II: 94-108.
- Luce, G. H., 1956, "The 550 Jātakas in Old Burma," *Artibus Asiae* 19-3/4: 291-307.
- Lunsingh Scheurleer, Pauline C. M. (ed.), 1985, *Asiatic Art in the Rijksmuseum, Amsterdam*, Amsterdam: Meulenhoff/Landshoff in coöperation with the Vereniging van Vrienden der Aziatische Kunst and the Rijksmuseum.
- Lunsingh Scheurleer, Pauline C. M. & Marijke J. Klokke, 1988, *Divine Bronze: Ancient Indonesian Bronzes from A.D. 600- to 1600: A Catalogue of the Exhibition in the Rijksmuseum, Amsterdam*, Leiden: E.J. Brill.
- McGill, Forrest (ed.), 2009, *Emerald Cities: Arts of Siam and Burma 1775-1950*, San Francisco: Asian Art Museum--Chong-Moon Lee Center for Asian Art and Culture.
- Musée National des Arts Asiatiques – Guimet [rédigé par Jean-François Jarrige, Marie-Catherine Rey, Francis Macouin ... et al.], 2001, *Album [du] musée national des arts asiatiques – Guimet*, Paris: Réunion des musées nationaux; Paris: Musée national des arts asiatiques - Guimet.
- Pichard, Pierre, 1995, *Inventory of Monuments at Pagan, vol.5: Monuments 1137-1439*, Gartmore: Kiscadale & Paris: UNESCO
- Rijksmuseum voor Volkenkunde, Leiden (Netherlands), 1967 (1956, 2nd. Dr), *Het leven van Buddha in de kunst*, Leiden: [s.n.].
- Schölvinc, Hester and Christien Oele, 2009, *Tropenmuseum: Visitor's Guide*, Amsterdam: KIT.
- Somkiart Lopetcharat, 2007, *Myanmar Buddha: The Image and Its History*, Bangkok: Siam International Books Company.
- Staatliche Museen zu Berlin [bearb. von Caren Dreyer; Lore Sander; Friederike Weis], 2002, *Dokumentation der Verluste, Band 3: Museum für Indische Kunst* [Verzeichnis seit 1945 vermisster Bestände der ehemaligen Indischen Abteilung des Museums für Völkerkunde, des heutigen Museums für Indische Kunst], Berlin: Staatliche Museen.
- 高楠順次郎監修 1971-1973 (1935-40) 『南伝大藏經』第28卷～第39卷 (小部經典六一一七; 本生經一一一二) 大正新脩大藏經刊行会 (大藏出版)
- Thomann, Th. H., 1923, *Pagan: Ein Jahrtausend Buddhistischer Tempelkunst*. Stuttgart.
- Weis, Friederike (ed.), 2000, *Museum für Indische Kunst, Berlin*, München; London; New York: Prestel Verlag.
- Whitebread, K. J., 1971, "Mediaeval Burmese Wall-paintings from a Temple at Pagan now in the Hamburgisches Museum für Völkerkunde, Hamburg," *Oriens Extremus* 18-1: 85-122.
- Yaldiz, Marianne, Raffael Dedo Gadebusch, Regina Hickmann, Friederike Weis, & Rajeshwari Ghose, 2000, *Magische Götterwelten: Werke aus dem Museum für Indische Kunst, Berlin*, Berlin: Staatliche Museen zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz, Museum für Indische Kunst.

## <注>

- ① 本調査は、平成 24 年度科学研究費補助金「南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラーシャ信仰とその造形に関する基礎的研究」（研究代表：大阪大学・肥塚隆）に基づく研究の一部である。
- ② イギリスの博物館所蔵のビルマ美術については、Blackburn 1994 が簡単なリスト化を行っているが、図版はなく、また、それぞれの詳細は各所蔵先に赴いて調査する必要がある。また、ヴィクトリア・アルバート美術館の所蔵作品については Lowry 1974 が、大英博物館の金銅仏については Blurton 2002 がある。そのほか、仏像集成として、Karow 1991、Hasson 1993、Somkiart 2007 などが有用である。また、ミャンマーでも、Htwun Hmat Win 1986 などの研究があるが、必ずしも網羅的、体系的ではない。
- ③ ギメ美術館の全般については、美術館のホームページのほか、秋山光和編 1968、アジア美術コレクションの概要については、Asia House Gallery 1974、Béguin 1992、Musée National des Arts Asiatiques - Guimet 2001 参照。そのほか、クメール美術のコレクションは Baptiste et Zéphir (ed.) 2008、チャンパ美術については Baptiste et Zéphir (ed.) 2005、インドネシア関係は Le Bonheur 1971 を参照。
- ④ 展示されていた各作品について、展示パネルの説明を邦訳し、その後に簡単な解説を加える型式で紹介していくこととする。
- ⑤ 通常の仏陀像と異なり王の姿をした仏陀像を、ビルマではザブパティ仏と呼んできた(原田 2009a、2009b、Karow 1991、Gutman 2001)。これとインドの宝冠仏、タイをはじめとする東南アジア、中国の宝冠仏との比較 (Bautze-Picron 2010) は、仏教文化、美術の伝播はもちろん、アジア域内における地域間の交渉を考える上で重要なテーマである。後考を俟ちたい。
- ⑥ ライデン民族学博物館のコレクションは、以下に述べるようにオンライン検索が可能である。ただし、なかには分類段階で不明とされたものや誤って他地域のものとしてされたものは、当然検索にはヒットしない。今回、収蔵庫の一部を見せていただいたが、インドネシア・コレクションの中に、ビルマの仏像が一点紛れ込んでいるのをたまたま知った。日本関係のコレクションはシーボルト・コレクションや浮世絵などの目録が発行されているが、東南アジア、もしくはインドネシア関係のものをまとめたものはないようである。その中では、仏教関係の作品を集めた小冊子 Rijksmuseum voor Volkenkunde, Leiden 1967 は、古いが有用である。
- ⑦ アムステルダム国立美術館のアジア・コレクションについては、ホームページのほか、Lunsingh Scheurleer (ed.) 1985 参照。インドネシアのブロンズ像については、Lunsingh Scheurleer & Klokke 1988 を参照。
- ⑧ 熱帯博物館の概要は、Schölvinc and Oele 2009 が詳しい。また、そのインドネシア・コレクションについては、The Asia Institute 1948、Legêne & van Dijk 2011、van Dijk & Wimo Ambala Bayang 2012 参照。
- ⑨ アジア美術館のインド、東南アジア、シルクロード美術のコレクションとその展示品の解説については、Weis (ed.) 2000 および Yaldiz ea al 2000 参照。第二次世界大戦中の戦闘および戦後の混乱の中で失われたか行方不明になったものについては、Staatliche Museen zu Berlin 2002 がリスト化し、一部は写真も掲載している。



---

® 同博物館のコレクションの存在は、東京外国語大学大学院生寺井淳一氏の教示による。記して感謝する。また、ビルマ・コレクションの簡単な紹介は、同館のホームページにも掲載されている (<http://www.voelkerkundemuseum.com/92-1-Asia.html>)。